

奈良盆地北西部の祭礼組織の研究

奈良県大和郡山市額田部の祭礼から

浦西 勉

Ritual Organization in Northwestern Nara Basin

はじめに

- ① 今日の額田部推古神社の正月及び秋祭りの現状
- ② 神仏分離と宮座・明治二年の一例
- ③ 額田部村の明細帳と額安寺の縁起の解釈について
- ④ 額田部村周辺の事例から
- ⑤ 寺院と宮座の対等関係の時代
- ⑥ 安堵の極楽寺と一夜松天神の金琳寺
結びにかえて

【論文要旨】

奈良盆地北西部の神社の祭礼組織である宮座に関する歴史的な把握を試みた。そもそも国家や地域や家においても本来大なり小なりの祭礼組織は古来から存在し、祭礼が行われていると考えられる。しかし、宮座という祭礼組織を考える場合、祭祀主体者はだれなのかという視点に立つて考えてみると、単純に一面的に定義づけることができない。そこで、宮座という祭礼組織を考えてみようとした時、私は大きく四期に時代を設定してみた。今、調査地の大和郡山市額田部の祭礼の今日の姿を第四期の宮座と考え、第三期・第二期・第一期へとたどってみた。そして第一期の宮座としての祭礼組織が必ず仏教寺院の組織の内部と大きく関与したところから発生していると考えた。これを宮座の第一期と設定した。仏教文化との習合を（濃度の差はある）持たない神社の祭礼組織は宮座とは考えられず、一般的に氏神信仰の範疇に入る。ここでは、古代寺院額安寺と村人との関係の問題が存在する。第二期の宮座と設定したのが

十五世紀初めからの郷・惣村の宮座である。今日、宮座といえは、この点が最も関心の的になっているが、私は第一期の宮座を念頭におかねば、この郷・惣村の宮座は解明できないと思っている。第三期と考えたのが十七世紀からの宮座で、一方において郷・惣村の宮座の解体と再編成と神道思想の専門家の誕生。もう一方において郷・惣の宮座をモデルにしながら近世的村落に発生した祭礼組織、つまり近世的宮座の成立と村落内における専門の神主の誕生である。第四期は明治期の神仏分離令による、それ以後の今日の祭礼組織の宮座の姿である。このように宮座には四つの型が認められその通時的な把握と問題点を、この地方で確認してみた。